

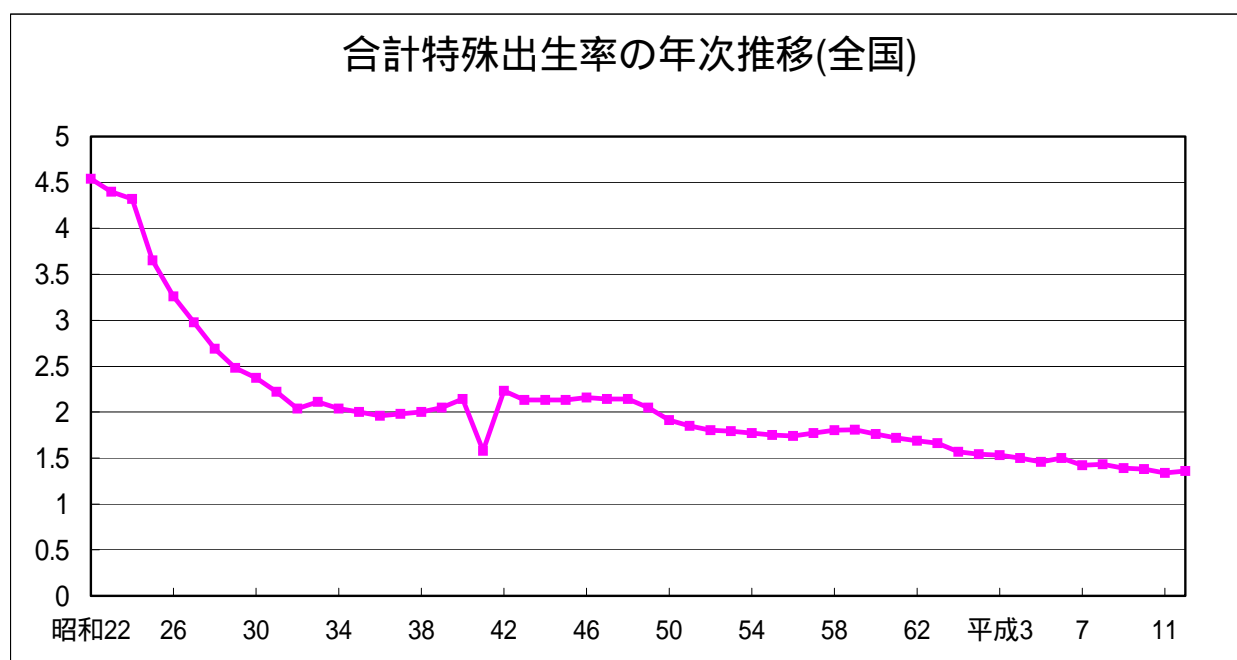
3 合計特殊出生率(total fertility rate)

【定義】

母親の年齢別に子供の出生数の合計を年齢別女子人口で割り、この数値を15歳～49歳について合計したものです。粗再生産率(crude reproduction rate)ともいいます。

【意味】

一人の女子が一生の間に生む平均子供数を表わします。この数値が2を下回り続けるといわゆる少子化が進行し、将来的には人口が減少していくことになります。わが国の合計特殊出生率は、第1次ベビーブームの昭和22～24年は4を超えていましたが、急激に低下し昭和31年に2.22となったあと、「ひのえうま」前後の特殊な動きを除けば昭和49年までは2.1前後の数値で安定していました。昭和50年に2を下回った後は低下傾向が続いています。



【実際の計算方法】

母親の年齢が5歳階級のデータの場合には次表のように行います。ここでは、平成14年版多摩小平保健所及び多摩東村山保健所の事業概要に掲載された平成13年の2保健所の管内の出生数と、平成14年1月1日現在の住民登録基本台帳による年齢別人口によって圏域の合計特殊出生率を計算する方法を示します。

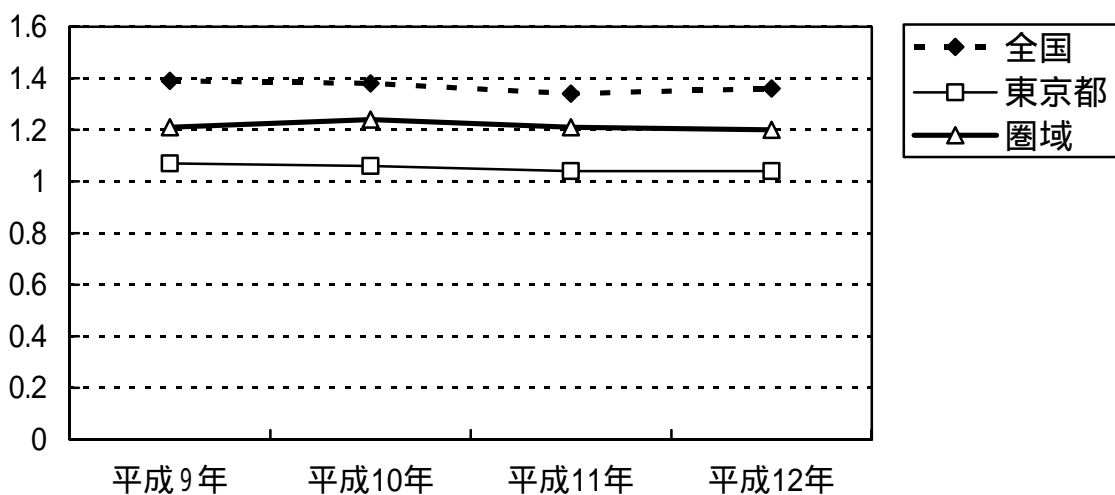
5歳階級別なので各年齢階級内の[出生数÷女子人口]の合計を求めるには5倍する必要がありますので注意してください。例えば、25～29歳の出生率の場合、この年齢階級内の出生率の合計は、25歳の母親、26歳の母親・・・29歳の母親という具合に5歳分を合計することになりますが、それぞれの出生率を平均値の0.0755で計算するようにしていますので、この数値を5倍したものが階級内の合計値になるわけです。

A	B	C	D	E
母親の年齢	出生数	各年齢階級の女子人口	年齢階級別の出生数÷女子人口	D×5
15-19	66	17,814	0.0037	0.0185
20-24	534	22,631	0.0236	0.1180
25-29	2,018	26,727	0.0755	0.3775
30-34	2,345	27,785	0.0844	0.4220
35-39	842	23,331	0.0361	0.1804
40-44	111	20,330	0.0055	0.0273
45-49	1	19,927	0.0001	0.0003
			0.2288	1.1440

合計特殊出生率が約 1.14 と計算できました。

【圏域のデータの推移】 経年的に圏域データをみてみましょう。

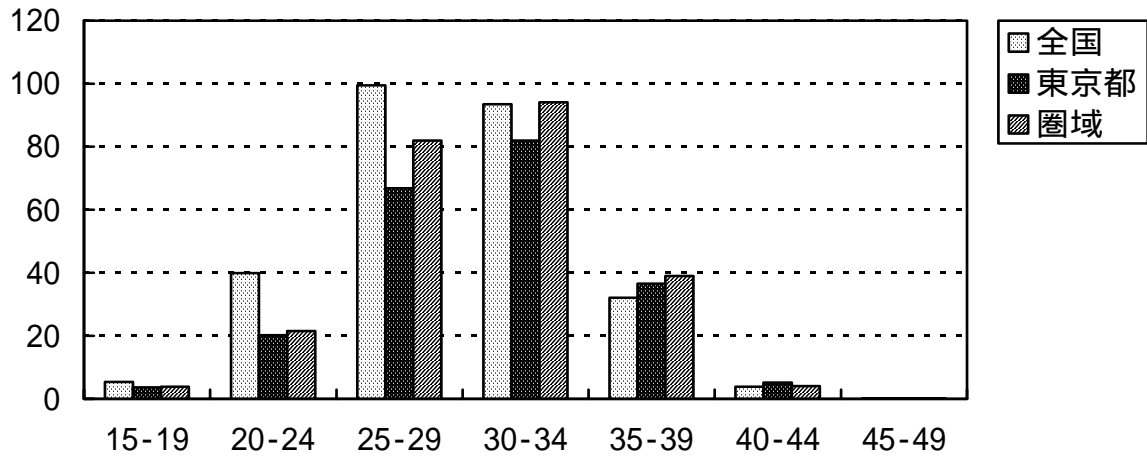
合計特殊出生率の推移



圏域の数値は、全国と東京都の値の中間的な推移をみせています。

合計特殊出生率は、出生の状況を 15～49 歳の女性について包括的に算出した指標です。改めて年齢階級別に圏域の出生率を全国あるいは東京都と比較してみると次のようなグラフが得られます。

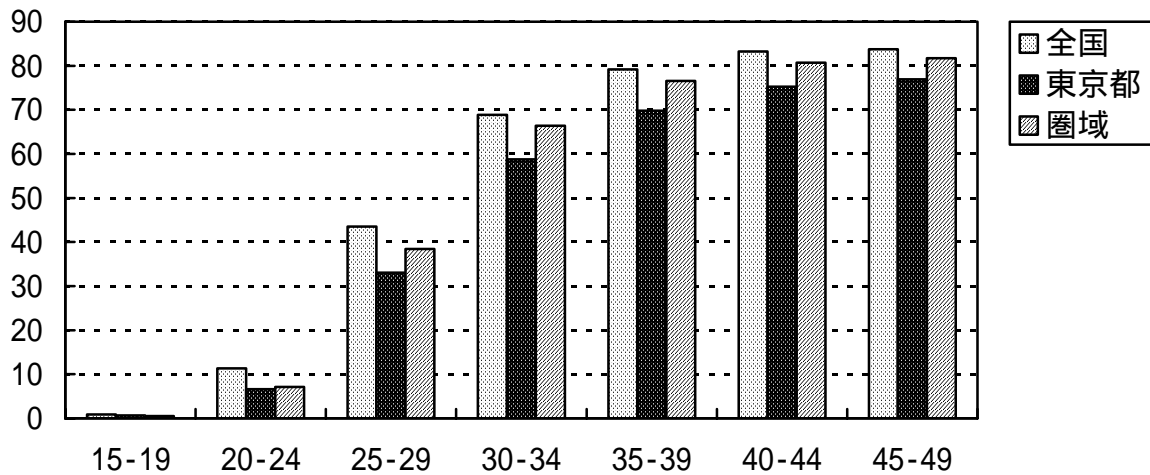
平成 12 年の年齢階級別出生率(各年齢階級女子人口 1000 対)



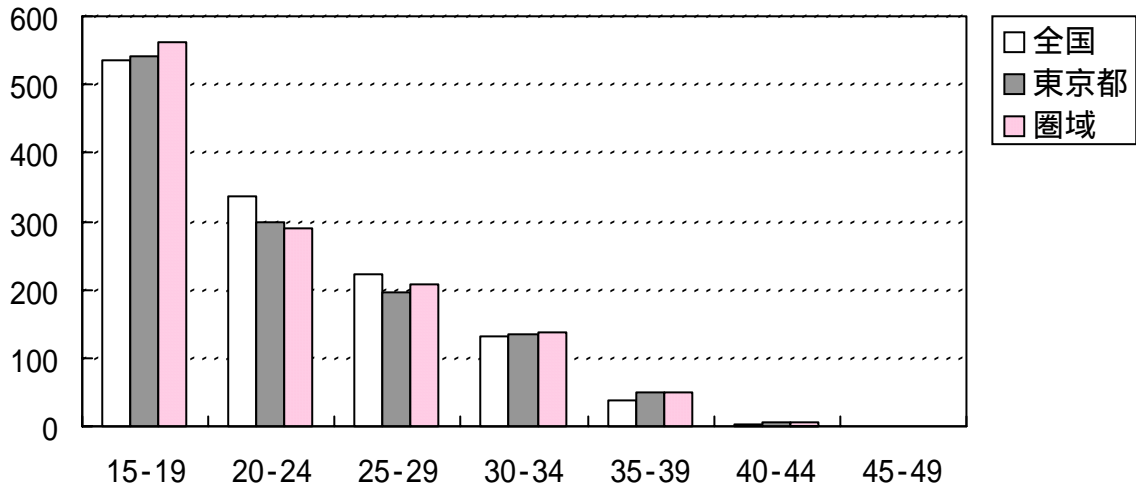
全国値と比較すると、29 歳以下の女性の出生率が低いのに対して 30 歳以上はむしろ高いことがわかります。全国値との違いをもたらしている背景には何があるのでしょうか。

年齢階級別に女性の有配偶者率と有配偶者出生率をみてみましょう。

年齢階級別女子有配偶者率(%)



年齢階級別有配偶女子の出生率(女子人口 1000対)



有配偶女子出生率で見ると、圏域の29歳以下の出生率について全国値との差が縮まっています。どうやら、若い夫婦が多いかどうか地域に大きな影響を与えているようです。これを踏まえた少子化対策を考える余地があるかもしれません。

【補足知識】

- ・ 1人の女子が一生涯の間に生む子供の数が合計特殊出生率で表わされる前提として、女子の年齢ごとにみた現在の出生率がこのまま続くという仮定をおいています。
- ・ 次世代の母親となるのは女兒ですから、ここに注目した指標が母の年齢別女兒特殊出生率の15～49歳の合計を総再生産率(gross reproduction rate)です。さらに、母になる年齢までの児の死亡を考慮したものが純再生産率(net reproduction rate)です。